

Yanomamö 5th edition / Napoleon A. Chagnon , 1997

Chapter8 The Acceleration of Change in Yanomamö land (p.227-260)

p.227-1

本章では Kaobawa の村とそれに近接する村々に影響を与え、変化させる要因に焦点を当てる（より広いパターンや傾向に注意）。

p.227-2

ヤノマミの地域で起こる変化は急激に加速。

変化を引き起こす主な出来事は過去 10 年間に起こった（先の 100 年間より）。

1987 年のゴールド・ラッシュ

教会と政府のいざこざがさらに変化を促進

← サレジオ会・教会の特権と政治的統治権を巡って

ヤノマミは外界の政治について知ろうとしているし、教会・政治的争いに加わろうとしている（特にサレジオ会ミッションの影響範囲内で）。

p.227-3

これらの問題に触れる前に、外部との接触の漸移的進展と、どのように変化が始まり加速しているかを追跡する。

GRADUAL VERSUS CATASTROPHIC CHANGE

p.227-4

人類学者はこれまで一つの文化が一方の文化へ作用した時、起こる変化のプロセスを「文化変容」として議論してきた。

p.227-5

一部のヤノマミの村の成員が外部者との接触を維持しようとしていた時、起こった変化（文化変容）について以前、筆者は議論した。

1960 年代後半、Rerebawa を Caracs へ連れて行った時の事

車の窓から飛び込む、対向車のライトを精霊と思う、等

p.228-1

初期の変化の兆候はさらに驚異的。

サレジオ会ミッションのいる村のあるヤノマミが遠方の（それまで接触していない）村まで襲撃をかけ、人をショットガンで撃ち殺す。

Rerebawa 「もし獰猛なヤノマミの男にショットガンを与えたら、それを使って人を殺してみたくなるだろう。ただそれを持っているという理由で」

宣教師からショットガンを入手することが当たり前。さらに別の入手先も。

ブラジルではもっと深刻←ベネズエラでナタを入手するのと同じくらい容易。

VARIATION IN DEGREE AND KIND OF CONTACT

p.228-2

1st edition (1968) が発行されてから、ヤノマミ・グループの変化の度合いは各地・各国で

多様。

Kobawa の村（40 年前からミッションとの直接的接触あり）のようにベネズエラのヤノマミの村の多くで文化的環境が著しく変化。

←しかし、まだ少なくとも直接的接触のない村もある。この本ですでに述べたものと酷似した環境が存在。

p.228-3

ベネズエラのヤノマミで起こった変化の多くは、増加したサレジオ会布教活動の結果。

主要なミッション・ポスト（Ocamo , Mavaca , Platanal）

←ミッションの影響、接触を広げる中心点。多くは河川流域付近。

内地にある例もある。

センターに比較的近い村がミッション・ポストに結びつき、依存。

宣教師が村に学校、経済「協同組合」を作る。

ヤノマミの教師（宣教師が訓練）を送り込む。←文化変容の担い手

p.228-4

ミッション・ポストとの距離が増大するにつれ、接触は減少し、さらに不規則になる。

宣教師、訓練されたヤノマミの agent は通常、河川を交通手段として用いる。

河川が村の近くでない場合、宣教師が徒歩で向かうか、ヤノマミの agent を送り込む。

←不便、非効率的

結果として、内地のグループを河川付近に引越しさせるか、ミッション・ポスト自体に移動させる。

↓

村の孤立性がなくなる（Kaobawa の村もこの政策の結果）。ミッションと親密化。大きな村からの分村。ミッション・ビレッジが巨大化。

例）Mavaca：500 人近くが居住。Kawavawa の村が位置する。

ParimaB：600 人以上が居住。NewTribe mission。Kaobawa の村の北の高地に位置する。

Padamo River：400 人近くが居住。DawsonEvangelical mission。

ブラジル側... 6 , 7 つのミッション・ポスト。各々 500 人以上。

生活に関する問題が増加。

資源が枯渇し、ヤノマミの経済的生活が次第に外部依存化。食糧、日常品。

集住した村は、ヤノマミの村の全体数からみると、次第に減少。

p.229-1

サレジオ・ミッションの影響範囲が過去 20 年間に飛躍的に拡大。

Ocamo , Mavaca , Platanal では重複。文化変容していない村はない。

p.229-2

このパターンはプロテスタント・ミッションが所在するベネズエラ・ヤノマミの地域にもみられるが、両者間の距離が大きく、影響範囲が互いに重複しない。

←しかし、ここ 10 年間に拡大し、Ocamo のサレジオ会ミッションのヤノマミと接触する重要な起点となりつつあるミッションもある。

p.229-3

類似するパターンがブラジルでも起こり、両国のミッション・ポストの影響範囲が互い

に密接になりつつある。

Mishimishimabowei-teri の人々が近年、ブラジルのサレジオ・ミッションを訪れ始めた。

p.229-4

ベネズエラ・ヤノマミの地域で、ミッションや他の外部者から十分に孤立、あるいは接触があっても最近か小規模な地域は僅か。

p.230-1

これらの「未接触」地域のヤノマミはすでに外界とその住人を知っている（1章で述べたようなファースト・コンタクト時とは異なる）。

定期的に訪れる他のヤノマミとの接触を通じて筆者のを知る。

これらの地域から誘拐された女性が調査していた村に住んでいた。

婚入してきた男性もあり。

1990・1991年調査以前、すでに外来者をみる（多くはブラジル・ミッション）。

1972年、ベネズエラ・ボーダー・コミッション・チームが Siapa 川奥地の村を訪問。

1974年、筆者の連れてきた大学院生達の訪問。

p.230-2

このような散発的で1日限りの接触にも関わらず、この地域にはヤノマミ文化伝統が良く残り、比較的文化変容していない村がある。

p.230-3

ベネズエラ・ヤノマミ村は少なくとも4つの明瞭な「接触」の階層・度合いに分類可能。

ミッション活動と関連する3つのレベルと、4つ目はほとんど直接的接触のない村

→文化変容を一般化する上で困難にする（外部との接触度合いで異なる健康問題除く）

p.231-1

1st edition が1968年に発刊されて以来、多くのグループが劇的に変化。

孤立した人々がまだ存在することが驚き。

比較的文化変容していない最後の部族社会。人類史上、最後の部族。

p.231-2

ブラジルでは類似したパターンが最近まで存在したが、1987年全て変化し、現在ベネズエラ程、孤立し接触のないヤノマミ・グループはいない。

THE 1987 BRAZILIAN GOLD RUSH

p.231-3

ブラジル側の変化は、国境付近におけるゴールド・ラッシュの結果。

ブラジル人金鉱夫（garimpeiros）によりもたらされた伝染病が村から村に広がる（国境近くの遠いベネズエラの村にさえ）。

←現地のヤノマミが採鉱地を訪ね、家に病気を持ち帰る。

ブラジル人金鉱夫がベネズエラに不法入国し、病気を持ってくる。

p.231-4

1987年のゴールド・ラッシュは最近のヤノマミの歴史で最も劇的な出来事。

ブラジル Roraima 州、Mucajai で開始。プロテスタント・ミッション・サイトあり。

p.231-5

筆者は数週間後に California, Santa Barbara で Consolata 僧侶から聞く。

Consolata 僧侶 (John Saffirio)

... ブラジル・ヤノマミに長年，居住。不法侵入の金鉱夫を報告，退去させようとしていたが，金鉱夫がミッションや他の外来者も不法と主張。ブラジル政府によりミッションが解散させられ筆者のもとへ。

結果として，鉱夫が多数侵入。すぐに約 40000 人に達する。

p.232-1

鉱夫グループと Mucajai 付近のヤノマミ・グループが衝突。

ヤノマミは銃で 4 人死亡。鉱夫も 1 人死亡。

p.232-2

採鉱のため，短期間で 100 以上の小飛行場がヤノマミの土地に設置される。

採鉱に際して生じた有害な水銀を川に捨てる。

ヤノマミの女性をレイプ。男性・子供を射殺。

← Jose Sarney 大統領政府は無視。鉱夫の要求受け容れる。

p.232-3

結局，Jose Sarney 大統領と政府は国民と世界に対して行われたヤノマミの保護・権利保障に関する声明が疑念をもって受け取られ，過去にネイティブ・アマゾンの住民が根絶した時以来の良い見込みを裏切ったという世論を理解し始める。

ブラジル政府への抗議・非難が即座に起こる。

多くの人々がヤノマミの未来に関心をもつ。

p.232-4

1990 年初め，Ferdinand Collor de Mello が大統領就任。

数週間内にヤノマミ地方を訪問。

鉱夫の設置した飛行場の破壊を命じる。

p.233-1

Collor 政権樹立後，すぐにヤノマミ地方の鉱夫数は減少。

ブラジル・ヤノマミの未来に関する慎重な国際的意見続く。

← しかし，政策が遅れ始める。

前大統領がヤノマミ地方を 21 の孤立した小地域に分割。開発のための空間残す。

← ブラジル・ヤノマミの文化的消滅を確実なものにする。

p.233-2

飛行場の内，14 だけが爆破。その後すぐに多くが復活。

1990 年が過ぎて，鉱夫が再び侵入し始める。

Collor 政権の高級官僚（特に軍人）が鉱夫の退去，土地区分の撤廃に反対。

首都から命じられた法律や計画が地方行政官，警察，採鉱から金銭的報酬を得る人々に無視あるいは拒まれる。

最終的に，鉱夫の大部分は政府により退去。

Massacre at Hashimo-teri

p.233-3

1993 年，ブラジル人鉱夫の 1 グループが Orinoco 川上流の Hashimo-teri の村を攻撃。17 人殺害。即座に国際的非難・抗議起きる。

p.233-4

ブラジル政府はすぐに調査開始。

虐殺の起きた村がベネズエラに位置することが判明。

ベネズエラ大統領 Ramon Velasquez は常任委員会に調査を命じる。筆者も参加（1993 年 9 月）。

ブラジル・ベネズエラ両方の様々なグループ，組織，人類学者，政府機関の間で調査を行う権利を巡る争い始まる。

← この時まで独裁的政治支配を行っていたサレジオ会驚愕。非難される。

25 人のブラジル人鉱夫がこの事件に関わっていたことが分かっていたにも関わらず，誰も有罪にされず，刑務所に送られなかった。

p.234-1

1100 人ものブラジル・ヤノマミが鉱夫のもたらした新しい伝染病や彼らの流入のせいで流行した在来の慢性病で死亡。

多くのブラジル・ヤノマミ・グループの伝統的文化や社会組織の主な側面が変化。

特に婚姻，血縁関係，出自システムの人口学的基盤が外部からの刺激に敏感。

ブラジル国境付近のベネズエラの主として未接触のヤノマミ村は危険。

年齢区分の内，子供が不足している村あり。← 伝染病の結果

ベネズエラ・ヤノマミの接触は多くの場合，ミッション・ポストを介すが，ブラジル人鉱夫と間接的接触のある遠方の村にも病気がもたらされる可能性が高くなっている。

← 幸い，8 つの遠方の村では人口統計学的にまだ影響が出ず，伝染病による打撃なし。

p.234-2

ブラジルの政策と違って，ベネズエラ政府（大統領 Carlos Andres Perez 下）はヤノマミとその周辺民族，熱帯雨林への保護政策を発展させ始める。

1991 年 6 月，テリトリーの保護に着手。

T.F.アマゾン約 32000mi² を特別生態保護区あるいは国立公園として法的に規定。

1991 年 8 月 1 日，正式発表。

p.234-3

ブラジルでも 1991 年末，Collor de Mello 大統領がブラジル・ヤノマミの居住する約 36000mi² (94000km²) を区画設定し，彼らの権利を保障する法律を制定することを示唆。

← 高級軍部官僚，Roraima やアマゾンの州知事，採鉱・経済開発グループらの強い反対押し切る。

p.235-1

1995 年，国際ブラジル先住民協会（FUNAI）が数百以上の不法侵入鉱夫がまだヤノマミ地方におり，彼らを発見し追放しようとしていることを筆者に報告。

それ以来，多数のブラジル人鉱夫がエリアに不法侵入。

KAOWAWA'S VILLAGE

p.235-2

多くのヤノマミ・グループの文化変化は一般化はできない。

それ故，Kaobawa の村で起こった変化を述べ，一般的な問題について説明する。

p.235-3

筆者は多くの重要な変化の起こった 1976 ～ 1984 年間，ヤノマミに戻れず，1985 年に現地調査を再開。

Kaobawa は以前より大きな村（Bisaasi-teri）でリーダーを継続。

プロセスタント・ミッションはサレジオ会の圧力で Kaobawa の地域から撤退。

1915 年，ベネズエラ政府が「ミッションに関する法律」を制定。

サレジオ会が通常の社会事業（健康，社会福祉，教育等）の責務を負う。

サレジオ会司教がテリトリーの統治者となる。

p.235-4

ベネズエラの法律で宗教の自由が保障されているにも関わらず，サレジオ会司教が超大な権限を持ち，プロテスタント・ミッションをヤノマミをカトリック化する際の障害とみなす。

雑誌記事で Evangelicos（米国出身プロテスタント）を酷評。

ヤノマミに英語を教え，米国帝国主義の植民地にしようとしているとされる。

これに反して，共産主義の州を設立しようとするブラジル人と米国に倣い資本主義の州を設立しようとするベネズエラ人あり。

p.236-1

サレジオ会ミッションは Kaobawa を元リーダーとして温情をもって接したが，年をとりすぎて新世界に適応不可。

若い男性をリーダーとして重視。Kaobawa の地域ではいつも 3 つのサレジオ会ミッション・ポストの内の 1 つから若いリーダー誕生。

テリトリー中心地（Caracas）や他国へ行かせる。政治指導者，人類学者らに会い，外界と対応するのに必要な技術習得。

伝統的リーダーは無視される。←急速な変化を理解不能。

p.236-2

不幸なことに今，若いリーダーはコミュニティーに幸福をもたらしていない。

1985 年，Dimanauwa（Mavaca の役人）が治安権を行使して嫌いな人達を悩ます。

Kaobawa らを逮捕，刑務所送りにしようとする。

←金を盗んだことが原因とするが，おそらくは Kaobawa らが彼を集団レイプを指揮した罪で罰しようとしていたことを恐れたため。

p.237-1

1985 年，調査再開時にみられた劇的变化の一つは分村の加速。

家族が分裂し，核家族単位の住居に住む。

これらの散在した住居から離れて，Mavaca に 12 の「村」あり。

←初めは伝統的な shabono 2 つ。

Kaobawa グループは 111 人で，Mavaca で最も大きなコミュニティー，最も保守的。

誰も船外機付きボートをもたない。

← S.U.Y.A.O（サレジオ会支援のヤノマミ協同組合）に依存することへ抵抗。ミッシ

ョンからは「怠惰な集団」と思われる。

p.237-2

筆者は Kaobawa グループに舟と船外機を買ってやろうとしたが、ミッションが拒む。

← ヤノマミに物資を得るために生産活動に従事することの意味，必要性を理解させるため。

ミッションとの妥協案

... 筆者は村に 500 ドル預け，住民は船外機を買うためにもう 500 ドル稼がす。

結局，長期の狩猟や遠方の同盟村に船外機を借りに行くためのガソリンを買うのに 500 ドルは使用される。

p.237-3

後に Raymond Hames（共同研究者）と筆者は Kaobawa の村の一人に 1985・1986・1987 年調査で手伝ってくれたお礼として船外機を与える。

→ 結局，船外機は村の共同所有となる。

p.238-1

ミッションが位置する場所，ミッションが訪問する場所に近接した地方の大きな村が次第に小さなサブ・グループに分裂しているのには 2 つの理由がある。

p.238-2

理由の一つは戦争の減少。ミッション・ポストの住人に不安がなくなる。

ショットガン，弾薬の入手可能。→ 弓矢で武装した敵に襲撃される可能性減少。

p.238-3

この地域では，ショットガンは本来，サレジオ会ミッションか，彼らの雇用人から入手。

近年，長距離ネットワークを通じてブラジルから大量流入。

さらに最近では S.U.Y.A.O を通じて入手・ストック（1989 年）。

← しかし，殺人に使用されることが分かり，すぐに撤収。

2 つのベネズエラ国立警備隊駐屯地設立。この内 1 つが Platanal のサレジオ会ミッションにあり，ヤノマミのショットガン供給源となる。

1991 年に 3 つ目の軍事基地が設立されたが，完成前に退廃。

→ 間接的に健康等の問題を増加させる。

後に Platanal の軍事基地は廃止。

1996 年には ParimaB がベネズエラ・ヤノマミの中心部にある唯一の軍事基地。

ブラジル国境と近接。ミッション・ポストあり。人口 600 人。

← ベネズエラ・ヤノマミで最も人口集中。Kaobawa の地域は 500 人で二位。

p.238-4

今ではショットガンはミッションで配られ，弓矢しかもたない遠方の住民との戦闘に際して圧倒的有利。

→ ショットガンで撃たれる危険性あり。退却しても船外機付きカヌーで追跡されることを恐れて襲撃されない。

安全のために大きな shabono に住む必要性無くなる。小さくて個別の住居を指向するようになる。

p.238-5

不幸にも、ショットガンは争いの抑止力や狩猟のためだけに使用されない。
遠方の村のヤノマミの多くがミッション・ビレッジからの襲撃を受け、銃殺されている。
← 歴史的に関係ないグループを「復讐」という理由で。

p.238-6

宣教師がヤノマミに戦争させるためにショットガンや弾薬を配ったということに対し、サレジオ会と他のミッションは強く否定。
ヤノマミは狩猟のためだけに銃を使うと主張。
ミッションから配られた銃・弾薬が他のヤノマミを殺害するのに使用されていることを信じないミッションもある。「噂」として退ける。
1960 年後半、Padre Luis の監督下にあるサレジオ会ミッションがショットガンをヤノマミに配る。遠方の村人が殺害される。
→ 筆者の注意により即座にショットガン撤収。

p.239-1

1967 年、Mucajai ミッション付近を調査時、プロテスタント・ミッションからショットガンで遠方の村から来たグループを攻撃、殺害。
→ 筆者はミッションに注意。弾薬を提供したことは認めるが、使われたショットガンの内、1・2 つはブラジル商人からのものとして、どの銃が殺しに使用されたか分からないとする。

p.239-2

1990 年、Hiomota-teri の遠方の村の一つが友好関係にあった隣接集団に攻撃される。
← 約束の犬を届けなかったという理由で。男性 2 人死亡、女性 7 人誘拐。
後にさらに若者が殺害される。

p.239-3

他の遠方の村でもショットガンを使用した殺害が多発。
← 船外機付きカヌーの利用により移動距離増大。

p.239-4

小さなコミュニティーや家族単位住居に分裂する 2 つ目の理由は物資の所有と関係。
初期段階、shabono は "long house" に分割される。
... 壁で仕切られ、居住者のプライバシーが保証される。通常の shabono では丸見え。
所有物を容易に人目に曝さないことにより、他村から来た人に振る舞う必要なし。
気前の良さを見せる文化伝統の消滅は、ミッション・ポストで経済的消費者となった結果。

p.240-1

最初、ミッションは自由に外来品を与えていたが、やがて家族内の重要人物に優先的に与え始める。
← ミッションとの協調性を芽生えさせるため。
Kaobawa のライバル、Hontonawa は 1968 年、100 人を連れて川向こうのカトリック側に移住。ショットガンと船外機で誘われる。
数年後、彼の子供達がミッションでスペイン語を学び、リーダーとして台頭。年老いた Hontonawa は Kaobawa 同様、指導的立場になく、物資の恩恵も受けていない。

Ocamo ミッションのヘッドマン Hioduwa も同様のパターン。

...最初，恩恵を受け，後に失墜し何の恩恵も受けれない。

p.240-2

次第に個人が手に入れたい物を得るために働かねばならなくなった。

ミッション施設建設に使用されるセメント・ブロック作りのための砂を川から引き上げる作業等。

Mavaca（や他のミッション）ヤノマミが必要とする物品増加。

ショットガン，弾薬，ボート，船外機，ガソリン，スベアパーツ，ツール，ラジオ，
テーブルライター，腕時計，ランタン，ヘッドランプ等。

→一生懸命働いて得た物を客に振る舞う気がなくなる。

p.240-3

ミッション・ポスト（特に Mavac や Ocamo）で起きているもう一つの変化は，多数のヤノマミ，時にはコミュニティ全体が物資供給源に接近するために移住していること。

1968 年，Mavaca は人口約 225 人。全て血縁関係者。同じ村出身。

1987 年，人口約 485 人。12 の小さな「村」と少数の個人・拡大家族住居から成る。

←人口増加の原因は，他所に住んでいたグループ，個人の移住。

コミュニティは自給自足できなくなり，次第に全く血縁関係にない人や遠い親戚から構成されるようになる。

ヤノマミ同士，訪問した外国人との間で盗みが多発。←元々の住民から不満。

筆者も東芝製コンピューターを盗まれ，川に捨てられる。

←ラジオかテープレコーダーと勘違い。

Reduction and Cocentration of Yanomamo Villages

p.241-1

1915 年，ベネズエラ「ミッションに関する法律」が制定。

カトリック・ミッションに先住民をミッション・ポストへ誘き寄せ，服従させる権利が与えられる。

←新大陸に対するスペイン植民地主義と同様。

p.241-2

ベネズエラのサレジオ会ミッションは何年にもわたって遠方の村をアクセスし易い川付近の地域や大きな集落（教育，変容，改宗，市民化が可能）へ移住させてきた。

1970 年前半，Upper Mavaca の遠方の村を訪ね始める。

Mishimishimabowei-teri の一部を分村させ，ボートで数時間の距離の Mavaca 川流域に移住させた。→ Haoyabowei-teri として知られる。

統治拠点として，「衛生」ポストの設置。

p.242-1

1985 年の調査再開時，Mishimishimabowei-teri と Kedeabowei-teri は Mavaca 川上流域からミッション・ポストのある下流の Mavakita へ移住したことを知る。

p.242-2

Mavakita の調査

Keodebavowei-teri の少数が Haoyabowei-teri を訪問。10 年振りに筆者と会い、感激。
Mishimishimabowei-teri は現れず。

p.242-3

Mavaca 上流域の調査

1968 ~ 1974 年、Mishimishimabowei-teri があり、約 670 人が居住。

調査時は 188 人のみ。← Haoyabowei-teri に移住したから。

Kedebabowei-teri (人口 164 人)

筆者が毎年物資を持ってくるのを待つのを諦め、移住。

その後、病気の増加に不満。ミッションが約束した機械を持ってこないことに失望。

Increased Contact and Sickness

p.243-1

Kedebabowei-teri の 1987 ~ 1992 年の死亡率は悲惨。

← サレジオ会ミッションに導かれた外界との長期接触により健康問題発生。健康サービスやその他の利益を得るには不十分。

p.243-2

1987 年、一時的キャンプ地で Kedebabowei-teri がマニオクを栽培しているのを見かける。
サレジオ会信徒がミッションに売るためにさせていた。

→ 生活に必要な畑経営の前にミッション供給品と交換するために作物生産を請け負わされた。

p.243-3

サレジオ会信徒が移住先に shabono より先に学校を建てさせる。

学校の後ろには子供を授業に誘き寄せるための食糧を貯蔵した倉庫を作る。

→ 学校の食糧を盗んだ容疑でクラブ・ファイトが起こり、若い男性 (Maroko) 死亡。

p.243-4

1987 年 Mavaca に移住した時 164 人いた内、1987 ~ 1990 年に成人 5 人、1990 ~ 1992 年に成人 10 人死亡。← 普通ではない数。

1992 年 1 月、伝染病流行。1 週間で 21 人死亡。多くは熟年、男性、リーダー (Sibarariwa 等)。1 年後、ほぼ全滅。

p.244-1

少なくとも 1 週間で 14 % が病死。

← ミッションにより文化変容しやすい大河川支流域に移住させられたのが原因。

p.244-2

Sibarariwa の死

Aramamisi-teri について最も良く知る人物。20 年近く冷淡だったが友好的になりつつあった。彼の死によって Aramamisi-teri の人口に関する歴史は消失。

p.244-3

Mavaca のサレジオ会ミッションは伝染病が起きてすぐに知ったが、誰かを送って調査しなかった。ボートで数時間の距離で、薬品入手も可能にも関わらず。

p.244-4

サレジオ会はまた、Washawa-teri (Iwahikoroba-teri の一部) を Mavakita の衛生ミッション付近移住させた。
→ 初めて外部との接触生じる。

p.244-5

Wachawa-teri の人口調査

1987 ~ 1991 年, 死亡率 15 %。

← 他の 16 村と比べて最も高い死亡率の一つ。

p.244-6

17 村における死亡率 (Fig.8.1)

... おおよそ 0 ~ 25 % を範囲。

p.244-7

ミッションとの接触度 (3 カテゴリー) からみた死亡率 (Fig.8.2)

ミッション居住者【Max】(約 5 %), 遠方地域居住者【min】(約 6.5 %) は低い。

中間的【intermediate】接触の村

(Kedebabowei-teri, Washawa-teri) は高い (20 % 近い)。

← 伝染病を招くには十分な接触。医療サービスを受けるには遠すぎる。

1992 年, Kedebabowei-teri の時はサレジオ会は病気の噂は知っていたにも関わらず救援を送らなかった。

p.245-1

ミッション・ビレッジの死亡率が低い。

← 外来者と 30 年の長期にわたって接触し, 通常最初の接触で病気を経験。

ミッションの医療サービスを受けられる。

ミッション・ビレッジの中にも死亡率が高い村あり。← 水質汚染

ベネズエラ・マラリア・コントロール・ステーションが 25 年以上汚染 (1988 年廃止)。

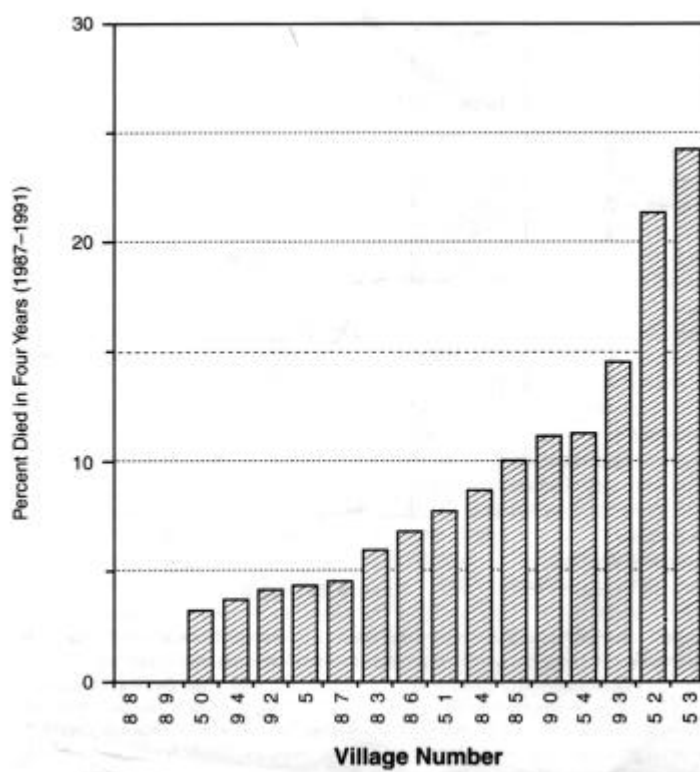


Fig.8.1 17 村における死亡率

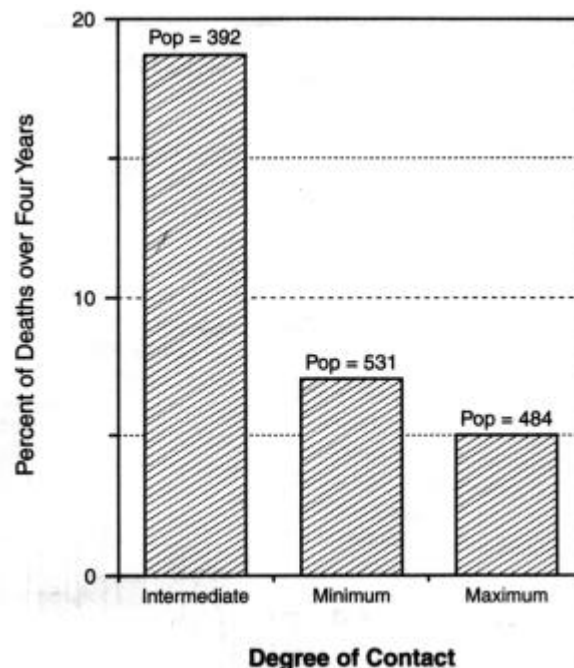


Fig.8.2 ミッションとの接触度からみた死亡率

Age/SexDistributions andMortalityPatterns

p.246-1

筆者の現地調査には疫学的重要性があり, 将来のヤノマミの健康管理に有益。

p.247-1

ヤノマミの人口に対する病気の影響を調べる方法には2つある。

一つ目は Fig.8.1/8.2 で示した通り。

p.247-2

二つ目は年齢・性別ごとの分布を調べること。

以前、人口調査してなくて、正確に最近誰が死亡した分からない村の高死亡率を見つけるのに有効な方法。

ヤノマミでこの種の歴史的データを得るのが困難な理由

最近、死亡した人のことを言おうとしない。

結婚が子供がいらない限りは存在したことすら分らない。

← 誰某の「妻」、誰某の「母」と呼ばれるため。

伝染病では年少者と高齢者が死亡することが多い。

高齢者は調べることが可能かもしれないが死亡年については時間軸の観念に乏しく、人口統計学的・疫学的研究には不十分。

子供の死は心の奥底にしまい込み、数年後忘却。母親に直接問うのは無理。他の情報提供者は子供の死を忘れることが多い。

p.247-3

以前に人口統計がなされてない場合、年齢・性別の人口分布を使うのが最も合理的。

ヤノマミの人口は未開社会の典型。

... 子供が多く、大人が少ない。全体の 30 ~ 40 % が 11 歳以下の子供。

← そうでない場合、子供に何かが起こったと考えられる。

p.247-4

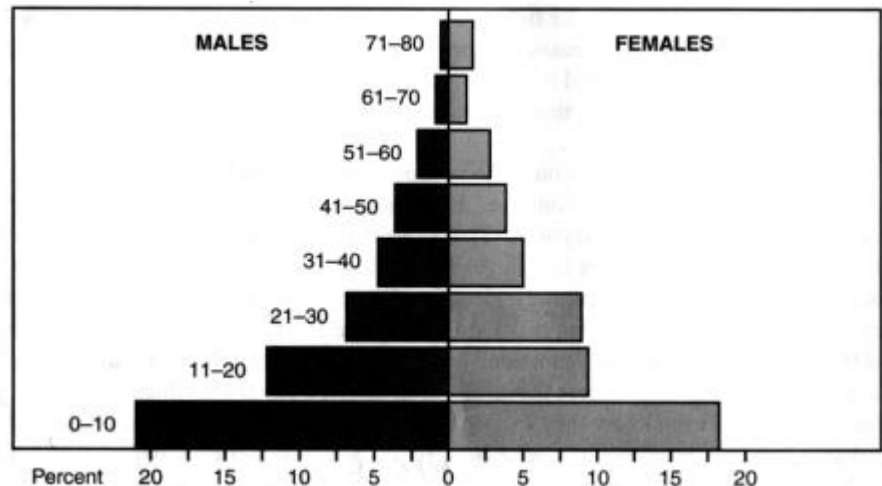
ヤノマミの村の異なる2群における年齢・性別の人口分布 (Fig.8.3/8.4)

ミッションから遠方の8村における人口分布 (Fig.8.3)

... 通常の分布を示す。

子供が多く、全体の 40 % 近い。シャープなピラミッド形。

アメリカの人口分布
... 頂上より僅かに底が広い。医療の進歩による。



p.248-1

Fig.8.3 は伝染病のない状態のヤノマミの人口。

Fig.8.3 遠方の8村における人口分布

対象は Siapa 盆地の村でミッションや金鉱夫との直接的接触無し。

1992 年は人口統計的に無傷だったが、彼らが訪れたミッション・ポストから病気を持ち帰る危険あり。しかし、ミッション化されたヤノマミが定期的に訪れそうもない。

← ヤノマミの訪問パターンは通常、「交易品貧困」村から「交易品豊富」村。

p.249-1

中間的接触のある 8 村における年齢・性別の人口分布 (Fig.8.4)

... 一般的な人口ピラミッドと異なる。比較的小児(特に 0-10 歳)が少ない。

→ 伝染病による子供の大量死を示す。通常の分布と比べると 15.6 % 減少。

p.250-1

Fig.8.4 の 8 村はブラジル人鉱夫との接触無し。

サレジオ会ミッションにおける外来者との接触が高死亡率の原因。

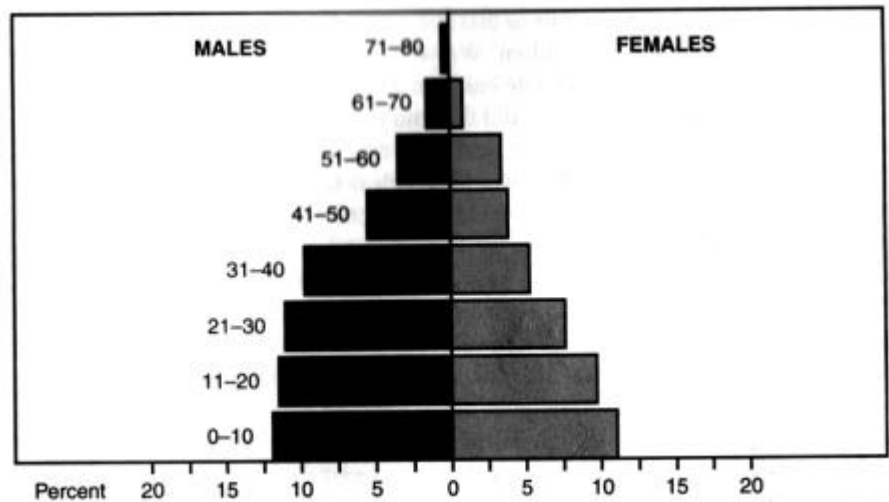


Fig.8.4 中間的接触のある 8 村における人口分布

p.250-2

通常, 定期的な接触後, 初めて高死亡率が生じる。

次に長期的接触と医療サービスのおかげで死亡率が低下, 安定する。

→ 医療サービスなしでは中間的接触の村は高死亡率で滅ぶ。

p.250-3

ベネズエラ政府はサレジオ会にヤノマミ統治権を与え, ポストに誘い出し服従させ, 彼らの市民になるように教育させた。

その結果, 新たな病気, 外来品の入手願望が発生。

← サレジオ会による西欧文化の押し付け

Education and Growing Awareness of OutsideWorld

p.251-1

Bisaasi-teri の子供は今では定期的にミッションのある学校へ登校。

ベネズエラ全国と同じ授業計画。通学用カヌーあり。

p.251-2

授業計画が伝統的なヤノマミの生活に影響。

学校が休みの日に狩猟・採集を行う等。

p.251-3

スペイン語とヤノマミ語両方の読み書きと同様, スペイン語を流暢に話すようになっている。

p.251-4/p.252-1

かなり遠方の村人までが Mavaca のミッション・ピレッジに通い, 読み書き可能。

Ushubiriwa (22 歳男性)

... 携帯コンピュータの画面から自分の父親の名前を見つける。

p.252-2

遠方の村の調査に Ushubiriwa らが同伴した時、彼らはキャンプ地で映画「ジョーズ」について会話していた。

p.252-3

ミッション・ビレッジでは世界規模の問題を知る者も出現。

「私はあなたの国が核爆弾を保有しているのを知っています。本当ですか？」

p.252-4

ブラジル・ヤノマミヘゴルド・ラッシュの問題について議論しに行く者もいた。

p.252-5

ブラジルでは DaviKobenawa の一人が遠くまで旅行し、リーダーを話し合いに招く。

← 非ヤノマミの援助団体からスポークスマンに担ぎ上げられる。

p.252-6

ヤノマミのリーダーが外部団体により作り出されることには危険が伴う。

← 団体自らの特別な関心事を推し進めるために利用される。

"Marrcelo Yanomami"

... Davi Kobenawa と同様、ヤノマミの将来の幸福を主張。

同時に「原住民がテリトリー内の資源を探る権利」を主張。

← 鉱夫指導者の意図を反映。

p.253-1

様々な宗教グループがそれぞれのミッションでリーダーを担ぎ上げ、問題が複雑化。

p.253-2

ヤノマミの政治的自意識とリーダーの出現の問題は外部のアドバイザーが全て近くのミッション、人類学者とは限らない。

ミッション、「保存」団体、保護活動家、個人、人類学者、政治家等がヤノマミの将来に国際的関心あり。

→ ヤノマミの商品化

p.253-3

全ての先住民、世界の熱帯雨林と生物多様性の現状の象徴として利用されている。

1989 年世界野生動物基金イギリス支部によるアメリカ・チャリティーツアー

プログラム名："Yanomamo"

← ツアーと関係なし。公衆の興味を引きつけるため。

CONTENDING INFLUENCES AND CONFLICTING INFORMATION

p.254-1

Kaobawa の地域に出現している政治的問題。

ヤノマミのリーダーはさらに外界を知るようになって相反する情報から外来者が自分の味方か否か判断しなければならない状況下にある。

p.254-2

外界の情報は通常、ミッション・ポストを通じてまずは言葉を理解し得る人々へ伝達。

しかし、遠方の村では外界と疎遠な人々は情報を混同したり歪めたり誤解したりする。

鉱夫が川に捨てる水銀の有害性に対する理解が「有害な魔法」。

p.254-3

1991 年 5 月，ドキュメンタリー製作（ヤノマミの健康，文化的危機に関する）のベネズエラ TV チームに遠方のヤノマミ地域に同伴。

p.255-1

Dorita-teri（中間的接触の村）を訪問。

← 以前，訪ねた時，歓迎を受け，戻ってきて一緒に住むことを希望される。

p.255-2

ヘリコプターで到着してすぐ，弓矢をもった男達に阻まれる。敵意あり。

shabono で話をするを持ちかける。

p.255-3

若い頃から知っているリーダー，Harokoiwa が登場。

p.255-4

筆者は伝染病を流行らせて赤ん坊を殺したと非難され，Harokoiwa に斧で殺されかける。

p.256-1

筆者は過去 27 年間，村の人々のためにやってきた良いことを話す。

誰がこのような嘘をついたか尋ねる。

→ ミッションに住むヤノマミの新リーダーの一人 "Alfredo" の仕業。

「村の人々の写真を撮ったせいで赤ん坊が死亡」，「写真を母国で売った」，「川に毒を流た」，「ヘリの騒音のせいでゲーム用動物がいなくなった」

p.256-2

これらの非難に関する調査を彼らに断言。

p.256-3

「ヘリの騒音のせいでゲーム用動物がいなくなった」という非難。

← Alfredo が，ブラジル人鉱夫の悪行の一つとされる事を知っていた誰かにそそのかされたことが原因。→ 筆者は「ブラジル人鉱夫」とされる。

p.257-1

人々と和解，誤解が解ける。

筆者は偽りの情報のために命取りになる出来事も起こり得ることを理解する。

p.257-2

筆者は 32 年間の調査で何度もヤノマミに殺されかけたが，過去に殺そうとした人物も今は友人になっている。

← 公平に彼らと付き合い，喧嘩や戦争の時，特定の立場をとらず，薬品や彼らの望む物資をもたらしたおかげ。

p.257-3

今，サレジオ会ミッション付近のヤノマミ村に戻ったら，筆者は危険に曝される。

← サレジオ会の一人が警告。

「ミッションの一つに現れた時，身の安全を保証できない」

ミッションにいるヤノマミの子分が偽りの情報で敵意を煽られている。

p.257-4

1991 年 8 月 Dorita-teri と Ashidowa-teri の調査時

Ashidowa-teri に Dorita-teri の代表として Harokoiwa らがやって来る。

p.258-1

Harokoiwa はサレジオ会の連中が嘘をついていたと分かり，筆者に村に来て再び友達になることを要請。

p.258-2

1 週間，彼の村へ行き，人々と楽しく過ごして筆者が学んだこと。

Platanal の住民は筆者を嫌っている。

← ミッションのヤノマミ（や僧侶）を介さず直接物資を Dorita-teri に持ってくるから。

Dorita-teri はミッションに依存する必要なし。

Dorita-teri は 25 % の高死亡率。

← 最も高い死亡率。外部との接触は Platanal からの人々，非ヤノマミの住民を含むミッション・コミュニティー，国立警備隊

Political, Moral and Philosophical Dilemmas

p.258-3

複雑な政治的・道徳的，そして哲学的問題。

我々はヤノマミを変化させるべきか，それを防ぐべきか？

ヤノマミは西欧文化のいくつかの側面に依存する必要性増加している。

接触のプロセスを止めたり，戻したりするのはすでに不可能。医療援助はすべき。

p.259-1

政治的に誰が，どのような政策で変化を導くべきか？

p.259-2

先住民の文化保護と将来の幸福において重要な 2 要素は土地と健康。

ベネズエラ大統領 Carlos Andres Perez はベネズエラ・ヤノマミの文化保護法を施行（1991 年）。

ブラジル政府（Ferdinand Collor de Melo 大統領）もヤノマミの土地の保護に乗り出す。

p.259-3

1992 年，ベネズエラ・アマゾンが州指定される。

同時に中央集権から地方分権へ。

やがてヤノマミは急速に外界へ曝され，それに組み込まれるだろう。

p.259-4

筆者は回避できない変化が村に起きた時，できる限りの援助はしたい。

p.259-5

ヤノマミの将来は今，微妙なバランス下にあり，世界の全ての部族とその居住地の象徴となっている。

p.260-1

Kaobawa の愛した息子（Ariwari）は 1985 年戻ってきた時には死亡。

それ以前に Kaobawa には若い妻と小さな子供がいたが伝染病で死亡。

p.260-2

1994 年，Rerebawa は Kaobawa の村で死亡。